

特集 サケが戻る日

〜川と共に生きるとは〜

私たちが普段なにげなく使っている水、私たちの生活に欠かせない水、その命の源とも呼べる水を運ぶ川。今月号の特集は、先日行われた「さけ稚魚放流会」から私たちの身近にある川を取り巻く環境について考えます。

「さけ稚魚放流会」を開催

4月17日、月形町と「花の里つきがたの水と緑を愛する会（鳥潟真二会長）」共催による「さけ稚魚放流会」が行われました。

放流会では、花の里こども園の園児や月形小学校の児童のほか、月形緑苑の利用者やちらいおつ遊び塾の園児など約110人が、石狩川水系の須部都川にサケの稚魚を放流しました。

この日放流されたのは、昨年の12月17日に月形町が一般社団法人日本海さけ・ます増殖事業協会の千歳採卵場より受精直後の卵（または発眼卵）800粒を受領し、花の里こども園など4施設で飼育、体長約5センチまで成長させた稚魚と、本年4月15日に同協会の京極ふ化場より受領した700尾の稚魚で、合計約1200尾の稚魚が放流されました。



▲ 12回目を迎えた稚魚の放流会

放流会に参加した子どもたちには、「わたしたちの川に大きくなって戻ってきてね」と笑顔で声をかけ、自分たちが育てた稚魚たちの旅立ちを見送りました。

この放流会は、平成20年から開催され、今年で12回目を迎えました。

なぜサケの稚魚を放流するのか？

皆さんは、なぜ、サケの稚魚を放流するのか考えたことがありますか。サケの稚魚を放流する目的とはなんでしょう。

放流された稚魚は、春の雪解けとともに降海し、日本沿岸部で1〜3カ月程度過ごし、生育後、オホーツク海から北太平洋に1年程度かけ成長しながら移動します。その後、ベーリング海とアラスカ海を行き来しながら3〜4年程度回遊し、成熟魚は産卵のために日本の生まれた川に9月から12月頃に戻り、産卵し、その生涯を閉じるといわれています。

町内では、放流会以外にも川にサケが戻って来られるように多くの取り組みが行われています。放流会と併せて、次のような活動が行われている意味を考えてみましょう。



川を守り、自然を守る

過去には、たくさんサケが遡上したであろう須部都川。在りし日の川の姿を取り戻そうと、私たちが知らないところで懸命に活動している人々がいます。

石狩川頭首工の魚類調査

ゲートで川の水をせき止めて水位を上げ、水を農業用水路へ流す石狩川頭首工には、魚が遡上する際に、支障となるゲートなどを回避する施設として、二つの魚の通り道(魚道)が設けられています。

一つは、ゲートで水をせき止めた時でも、魚の通り道を確保する「開門式魚道」です。もう一つは、魚が泳ぐ速度に合わせて、いろいろな種類の魚の遡上を可能にする「3連式魚道」です。

石狩川頭首工を管理する札幌開発建設部篠津地域農業施設管理支所は、平成28年の魚道管理調査で、しばらくの間確認されていなかったサケの遡上を確認することができました。

須部都川への遡上に明るい兆しが見え始めたのは、このときからです。また、石狩川頭首工では、平成29年から毎年、魚類調査の見学会を開き、月形小学校の児童が頭首工の機能や石狩川を遡上する魚の生態系について、実際に施設を目で見て、魚に触れ親しみながら、自然の大切さを学んでいます。

須部都川の魚類生息調査

平成20年からサケの稚魚を放流している須部都川では、札幌開発建設部岩見沢河川事務所職員による魚類調査の結果、平成29年11月、待ちに待ったサケの遡上・産卵行動が確認されました。

しかし、このとき同時に、毎年サケの稚魚を放流していた場所(放流会場)の下流に流木が堆積している魚道や新たに魚道が必要とされる箇所が確認され、サケの遡上に支障をきたしていることが判明、早急な対応が望まれました。

須部都川の流木撤去作業

平成30年6月、須部都川に設置されている魚道3カ所のうち2カ所で、たくさん流木が堆積し、水が通っていない場所の流木撤去作業が行われました。

この作業は、国の機関である岩見沢河川事務所、北海道の機関である札幌建設管理部

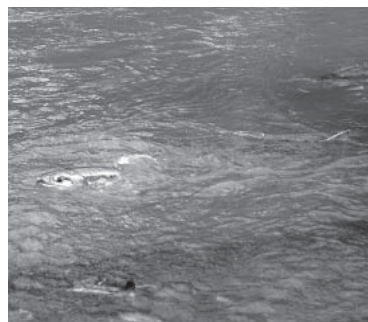
▶石狩川頭首工魚道の魚類調査



▲魚道調査を見学する児童たち



▲過酷な流木撤去作業



▲H29 須部都川にサケが遡上

稚魚の放流から考えること

以前は、月形町にも多くのサケが遡上していたことは、想像が私たちの生活の発展とともに作られていきました。

平成29年に須部都川で3ペア(計6尾)のサケの遡上・産卵行動が確認されたことは、サケの稚魚の放流という1つの行動だけで生まれた結果ではありません。

に難くありません。ですが、高度経済成長期の中でまちが発展、農地が拡大するなど、水源を必要とする時代の中で開発が行われ、河川の水質の悪化を招きました。また、取水するためのダムの建設や、水害・土砂災害から生活を守るための治水を目的とした河川改修などが行われ、サケが遡上できない環境が私たちの生活の発展とともに作られていきました。

以前のようにはサケがたくさん戻って来る川にするためには、私たちが自然の環境を整えなくてはなりません。そして、それは私たち自身のためでもあるのです。サケの稚魚の放流や遡上、私たちが生活で欠かせない水や自然を守るための大切さを考えるきっかけになるのではないのでしょうか。



環境教育の一環として千歳市の「サケのふるさと千歳水族館」を訪れたことをきっかけに

サケが戻ってくる川に

平成9年に設立し、今年で22年目を迎えた「花の里つきがたの水と緑を愛する会」は、サケの稚魚の放流会をはじめ、須部都川の流木撤去や石狩川頭首工の魚類調査見学会など、町だけではなく、国道などとも協力して河川愛護活動をされている団体です。

会長の鳥潟真二さんにこれまでの活動と、これからの展望をお伺いしました。

サケは、5年も6年もかけて自力で川へ戻ってきませんが、放流事業をスタートした時から、須部都川は他の川に比べて環境が厳しく、本当に遡上するのだろうかという不安がありました。

放流した稚魚が遡上する確率は5%とも3%ともいわれていますが、その低い確率に達するだけでもサケが遡上しやすく、状態が良い川であるとの結果なのです。

放流して10年目が経過し、事業の成果が確認できないもどかしさから、会員の間に迷

自然にも人にも 気持ちを持って接したい



■インタビュー■
花の里つきがたの水と緑を愛する会
鳥潟 真二 会長

いが生じはじめました。放流の方法はこれで良かったのかいつも悩んでいました。実績や確証があつて始めた事業ではありません。ただ、多くの皆さんの協力があつて実施してきた事業です。安易に止めるという判断はできませんでした。

自然への感謝から行動

節目となる10回目の放流会を終え、次年度以降の「見直し」を含めた事業計画に取り掛かった矢先、須部都川でサケの遡上が確認されました。この時はさすがに「サケの神様」がいるのかと思いましたが、

大げさな言い方になるかも知れませんが、自然に守られながら私たちの生活は成り立っていると思います。自然に守ってもらっている分、自分たちもお返ししなければなりません。環境を守る、自然を大切に、緑や水を汚さないようにするということは、そういうことではないかと思えます。

自分たちで環境を変えることができませぬ。川を汚しているのは、ほとんどが私たちではないでしょうか。

例えば、月形町の町民が1年に1個でもいいから空き缶を拾ったとしたら、月形町でも3000個ものごみが拾えることになります。これは地味に見えるかも知れませんがすごいことです。このような小さなことの積み重ねがとても重要だと思えます。

活動を続けることで成長

月形町の自然を大切にするために、子どもたちだけではできないことがたくさんあります。私たち大人ができることは、子どもたちに学ぶチャンスを作ることだと思っています。

今後の活動としては、これまでの活動で学んだことを活かして、事業を継続していきたいと思えます。続けることによって自分たちも成長していると思えます。

何かを大切にしようというとは、その根底に人の気持ちがないではできません。それは、自然と人、人と人も同じです。お互いが認め合うことで関係が作られ、継続していきます。

今後とも人の気持ちを大切にしながら、自然を守る活動を続けていけたらと思います。



花の里つきがたの水と緑を愛する会

会員募集中!

一緒に活動していただける方を募集しています。詳しくは、事務局までお問い合わせください。

【事務局】(株)鳥潟組内 ☎ 53-2735

